

村川拓也演出作品

Fools speak while wise men listen

「なんで中国なのか」とか「そんなこと問題にしなくてもいいんじゃないか」とかそういう雰囲気がありますが、いやずでに日本人はそれぞれ個人的に中国や中国人に対して解決しがたい問題を抱えているはずだし、実はその問題に対して小さな答えをすでに持っているような気がします。中国人も同様に、日本や日本人に対して別の問題と小さな答えを個人的にすでに持っているのではないかと思います。

彼らは同じ舞台に立ち、向かい合い、対話を始めます。

村川拓也

日本人と中国人の対話を描き、互いの小さな気だるさを眼前の現実として暴露する『Fools speak while wise men listen』。2017年に上演予定の〈日本・中国・韓国〉に関わる新作公演に向けた作品への系譜として、東京-京都の2都市で再演。



東京公演 2017年3月4日（土）～3月5日（日） 会場 | 早稲田小劇場どらま館

京都公演 2017年3月9日（木）～3月12日（日） 会場 | アトリエ劇研

Fools speak while wise men listen 作品概要

2016年9月に京都のアトリエ劇研にて上演された、『Fools speak while wise men listen』という作品を、東京と京都の2都市で再演します。この作品は、若手の俳優を目的とする「劇研アクターズラボ」という企画の中で制作されましたが、やがて稽古場での関心は、日本と中国の関係について考える事に向かいました。それは、2017年の秋に京都で上演が予定されている、〈日本・中国・韓国〉に関わる村川拓也の新作公演に向けて必要な過程であり、同時に、演劇がどのように《現在》と呼ばれる時間に関わるべきなのかを考えるために、不可欠な関心であったのかもかもしれません。

| 初演時の上演について

これまで村川は、戯曲や俳優などの演劇にとって不可欠であると考えられる幾つもの要素を疑いながら、毎回の上演において、常に新しい方法と素材を採用し作品の発表を続けています。介護士の日常を演劇の舞台上で再構成した『ツァイトゲーバー』、出演者未定のまま本番当日を迎える『エヴェレットゴーストラインズ』、振り付けをダンサーの記憶と捉え、過去の表象としてのダンスを上演する『終わり』など、作品の形式はそのつど変化しながら、その根底では過去、不在、記憶などのモチーフを扱い、観客とその上演が所属している現実の姿を暴露します。

『Fools speak while wise men listen』の初演では、日本人、中国人それぞれの出演者が互いに向かい合い、恋愛観、文化の違い、風俗についてなどを語り合いながら、その他愛ない話題の中に、小さな違和感が不意に現れてしまう瞬間を注意深く捕らえました。その無意識の言葉は、4組それぞれのグループが、同じ対話をそれぞれ4回ずつ、毎回の所作までも正確に反復することによって観客へ強く印象づけられ、その執拗な繰り返しの中で描かれた二人の関係は、語り合う二人の強張りや違和感という具体的な出来事から、中国や日本、あるいは国家や差別という事を考える際に感じる漠然とした疲れや緊張感までもが透かされてしまう言葉と沈黙として表現されました。

| ヘイトスピーチに抗う言葉

片方が《ネトウヨ》、もう片方が《反日サヨク》として極端な舵を切りながら、互いを何者であるか一方的に《認定》する言説が増え続ける現在において、日本人と中国人による対話を形式にしたこの上演は、排他的な全体主義に向かいつつある現代に対する批評の意味を持ちながら、同時に、他者によってあらかじめ準備されてしまう偏見や差別心を隠そうとする意思や気遣いが、かえって現在の日中間に存在する気まずさ、緊張、気だるさなども暴露する事となりました。しかし、それでもこの作品は、他者に話しかけ、そして他者の言葉を聞く事だけが、唯一の方法として採用されました。それは、私たちではないものを全て排除する扇動的な演説に抗うことであり、同時に、この作品の持つ対話の素朴さが、現在の日本の状況に問いを向ける契機になると考えていたからかもしれません。

| 中国でのWSと、韓国での『国家』の上演。そして新作へ向けて

2016年9月の初演あと、村川は、中国でのワークショップとその発表公演、そして、ユン・ハンソル監修の『国家』(韓国 ver.)の2作品を各国で上演しました。いずれも現地に滞在し、そこで募集した現地出演者たちと共に作品を発表する事は、自身がどのような立場であるのかが問われ、人種、政治、国家などの言葉に対し、どのような切実さを持って関わるべきかを考える契機となりました。それは2017年に予定されている、《日本・中国・韓国》の三国にまつわる新作公演へ向けての大きな変化であると共に、今回の再演にも多大な影響を与えるに違いありません。

| 再演という可能性

前作『エヴェレットゴーストラインズ』では、まず始めに村川が公演の日時と舞台上で行うべき指示の書かれた手紙を書き、そして手紙の受取人は、その指示に従う自由と断る自由を同時に与えられたまま本番当日を迎える、不在と偶然性に焦点を当てた出演者未定の上演が行われたのですが、一年後の再演では上演形式を大きく変更し、ある個人の死についての証言から、観客個人の記憶へ向かう ver. B「顔」や、あらゆる記録装置が持ち込まれた舞台上でその場の現実が採集される過程を描いた ver. C「記録」("ARCHIVES PAY"との共同制作)など、不在や死、記憶など、4つの方法でそれぞれ異なった上演形式を採用しました。この再演が《初演のコンセプトは引き継ぎ、この作品をある一つの演劇の形式であると捉え、その形式に4つの新しいアイデアを投げ入れることによって本番ごとに異なる作品を生み出す》ことを目論まれたのと同様に、今作の『Fools speak while wise men listen』もまた、初演時から着実に激化する現実と、韓国、中国での上演を経た村川自身の経験によって、さらなる変貌を遂げることとなるでしょう。ぜひ、ご期待ください。



劇評

演出家・ドキュメンタリー映像作家の村川拓也はこれまで、観客の1人を「被介護者」役として舞台上上げて、本職の介護労働者が障害者介護をデモンストラーションする『ツァイトゲーバー』や、「出演者候補」に指示書を送り、要請に応じて現われた出演者（と「不在」の出演者）によって舞台上の出来事が進行する『エヴェレットゴーストラインズ』などの作品において、演劇の原理的枠組みを鋭く問い直してきた。本作『Fools speak while wise men listen』は、日本人と中国人の「対話」の体裁を取りつつ、「対話」の不均衡さを露わにしなが、反復構造とズレによって「演劇と認知」の問題に言及し、モノローグ／ダイアログという演劇の構造へと鋭く迫っていた（本作は来年に再演が予定されている。以下はネタバレを含むことをご了承願いたい）。

白線テープで床に印された矩形のフレームの中に、2本のマイクが置かれ、舞台奥のスピーカーとつながっている。舞台装置は極めてシンプルだ。開演前に（あるいはすでに上演は始まっているのか）、ボーイッシュな雰囲気若いの女性が客席に向かって、中国語とジェスチャーで「携帯の電源を切って下さい」といった前説を述べる。2本のマイクは、向かって左側が「Japanese」、右側が「Chinese」であることも伝えられる。前説を述べ終えると、彼女はそのまま舞台の壁際に留まり続け、舞台中央に囲われた「フレーム」の中で、日本人と中国人の「対話」が始まる。

女性ペア、男性ペア、もう1組の女性ペア、女性3人と男性1人。対話相手は固定されたまま、計4組の対話が（ほぼ同じ内容で）4セット繰り返される。「初めまして。お名前は何ですか？」と互いに名乗り合い、にこやかなムードで始まる会話は、全て日本語で交わされる。中国人たちは皆、流暢な日本語を話し、日本での居住年数が長いのだろうと思わせる。だが、「初対面」という設定、微妙に隔たった距離感、マイクの介在という間接性、といった仕掛けによって、相手との適切な距離感を計りかねている緊張感が微温的に漂っている。雑談めいた会話はそれぞれ、「結婚と国籍」「日本のフーズク」「中国人観光客のマナー」「アベノミクスと安倍首相」「パンダ」というキーワードを巡るものだ。だが、例えば「安倍首相についてどう思うか」という中国人からの問いかけは、「生活が良くなった実感がなくて支持しない」という答えによって経済問題にすり替えられ、安保法制や憲法改正といったきわどい話題に触れることは回避されてしまう。あるいは、「日本のフーズク」について尋ねる中国人男性は、女性差別と一体化した民族差別を発言するが、対面する日本人男性は、彼の声が聞こえていないかのように無視し、黙ったままだ。

だが、こうした「日本」と「中国」のあいだに横たわる政治的緊張感や心理的な隔たり、隠れた差別意識は、あくまで本作の表層に過ぎない。本作は「日本と中国の対話」という体裁を通して、むしろ対話の場における不均衡さや強制力を露呈させる。通訳者を介さず、同一言語（日本語）の使用を課するという強制力が働くこの場では、関係性は圧倒的に不均衡なものとしてあるからだ。そして、所在なげにずっと壁際で佇む彼女。「対話」を形づくるフレームの「外部」に置かれ、対話の場から疎外された彼女の存在は、この白線で囲われた空間が、「日本人」「中国人」というナショナルスティックな枠組みにはめ込んで発言させる場であることを示す。それは、より抽象的には、国籍によってカテゴライズ／分断する認識の枠組みだ。「対話」シーンの切れ目のタイミングで、彼女はフレームの中に足を踏み入れてマイクを手取るが、もじもじと躊躇ったまま何も話さない。ある時は「右側（＝中国人）」のマイクを取り、次は「左側（＝日本人）」のマイクに持ち替える姿は、「中国人として発言するのか」「日本人として発言するのか」という、2つのナショナルアイデンティティの選択の狭間で躊躇していることを示す。

そして本作のもう一つの真の主題は、「反復構造とズレ」がもたらす、「演劇（本物らしさ）は観客の認知によって決まる」というテーゼである。本作の基本的構造は、計4組のほぼ同じ対話が4セット繰り返される反復構造にあるが、反復される度に少しずつズレが侵入してくるのだ。会話のテンポ、発話の「間」の取り方、笑い声のトーン、声のボリューム、身振りの大きさなどが少しずつ変化を加えて「再生」されることで、「ごく自然に見える／演技としては控えめ／ごちない演技／不自然で違和感を感じる」という印象のグラデーションが発生する。それは、「演出家が俳優に対して、少しずつ注文や条件を変えながら、出力のチューニング調整を行なう稽古を見ているような感覚」だ。

そして、「演技のグラデーション」が虚構の枠組みを突き抜けて「リアルな心情の告白」の極へと一気に振り切れるのが、疎外されていた彼女の「独白」とその後続く、最後の1セットである。あんなに躊躇っていた彼女がついにマイクを持ち、中国語と日本語を交互に交えながら、やや震えを帯びた声で観客に語りかける。中国での幸せな子供時代、迫害を受けて日本に渡ったこと、日本の学校でのいじめ、日本社会になじめない日々、それでも日本で生きていく決意をしたこと…。抽象化された詩的な語りだが、彼女自身の半生だろう（と思われる）。真偽は定かではない。村川が書いた「台本（フィクション）」かもしれない。しかし、「台詞」として固定された対話の反復・再生を経験した後では、彼女の語りは「今ここでのリアルな告白」として迫ってくる。前半の時間を通して「虚構」に染められた「ダイアログ」の形式と対置された、「モノローグ」であることも大きい。

この「語り」を経由した後では、再開・再生される「対話」は、もはや同じものとして目に映らない。会話の「間」を長めに取り、身振りや声のトーンが抑制されることもあいまって、嘘臭さが抜けたように感じるのだ。そして出演者の一人は、今までの「対話の台本」には無かった個人的なことを語り始める。マイクを介さず、一歩相手の方へ踏み出すことで、その語りはより親密さや切実さを帯びる。だが、その虚飾のない切実さは、「モノローグ」の形式へと回収されてしまうことで、目の前に対面する相手には届かない。リアルで切実な語りであるからこそ、いっそう残酷さが際立つ（この、感情的な揺さぶりと論理的な形式の明瞭さと引き裂かれる経験が、村川作品に通底する「残酷さ」である）。

このように本作は、「（不在の）演出家が俳優の演技をチューニング調整する稽古風景」それ自体を舞台上で「再現」することで、演劇を成立させる「本物らしさ」とは、見る側・受け手（観客）の認知の問題であることを鋭く照射していた。その「稽古風景」はまた、「日本と中国が困難な対話を重ねようと努力する練習風景」でもある。3日間の上演が終われば、舞台装置としての（多くを物語っていた）白線テープはきれいに剥がされて消えるだろう。しかし、私たちの意識の中の「白線テープ」が全て剥がされる時は来るのだろうか。

村川拓也（演出家・映像作家）

1982 年生まれ。2005 年、京都造形芸術大学卒業。2009 年まで、地点に演出助手として所属。独立後は演出家として活動を開始し、ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を様々な分野で発表している。フィクション性とノンフィクション性の境界に生まれる村川の作品は、表現の方法論を問い直すだけでなく、現実世界での生のリアリティとは何かを模索する。主な作品に、『ツァイトゲーバー』（フェスティバルトーキョー2011 公募プログラム）、ドキュメンタリー映画『沖へ』（映像芸術祭 MOVING2012）、『言葉』（フェスティバルトーキョー2012 主催プログラム）、『羅生門』（AAF リージョナル・シアター2013 委託作品）、『エヴェレットゴーストラインズ』（京都国際舞台芸術祭 2014 公式プログラム）など。『ツァイトゲーバー』は各地で再演され、2014 年 5 月には HAUHebbel am Ufer（ベルリン）の「Japan Syndrome Art and Politics after Fukushima」にて上演された。また、2015 年には、韓国・光州 Asia Arts Center Theater にて滞留制作を行う。セゾン文化財団助成対象アーティスト。



公演詳細、チケット予約 ▶▶▶ 特設ウェブサイト <https://murakawa-theater.jimdo.com>

東京公演

3月4日(土) 15:00- / 19:00-
3月5日(日) 15:00-

一般 [前売] 2,800 円 [当日] 3,000 円
学生 [前売] 2,500 円 [当日] 2,800 円

早稲田小劇場どらま館
〒169-0071 東京都新宿区戸塚町 1 丁目 101-3

京都公演

3月9日(木) 19:00-
3月10日(金) 19:00-
3月11日(土) 15:00-
3月12日(日) 15:00-

一般 [前売] 2,500 円 [当日] 2,800 円
学生 [前売] 2,200 円 [当日] 2,500 円

アトリエ劇研
〒606-0856 京都市左京区下鴨塚本町 1

演出 | 村川拓也
出演 | 穂月萌 石井花果 出村良太 井上向日葵 川口航
佐々木峻一 諏訪七海 南風盛もえ 桃地伸弥
黄冬姝 徐奥坤 孫日環 劉青 楊慧 他

舞台監督 | 浜村修司 (GEKKEN staffroom)
照明 | 池辺茜 (GEKKEN staffroom)
制作 | 長澤慶太

【東京公演】

主催 | 村川拓也・NPO 劇研 共催 | 早稲田大学
助成 | 公益財団法人セゾン文化財団

【京都公演】

主催 | 村川拓也 共催 | アトリエ劇研
助成 | 公益財団法人セゾン文化財団

公演に関するお問い合わせ

村川拓也演劇公演

Mail : murakawa.theater@gmail.com
TEL: 070-6925-5835 (ナガサワ)
Web : <https://murakawa-theater.jimdo.com>